

複文における丁寧形と普通形のあらわれ方

—従属節「～が」「～けれど」を含む複文の場合—

黒木晶子

1. 研究の動機

小論文作成に関する指導においては、その構成についての指導とともに、表現形式のことが問題になるが、その場合、文体⁽¹⁾の混用も問題の一つとして取り上げられることがある。

小論文における文体の混用に関しては、一つの文章において主節の文末が丁寧形で終わる文と普通形で終わる文とが混用されている場合があるが((1))、それとともに、一文において丁寧形と普通形が混用されている例も見られる((2))。

(1) 私が住むとしたら、伝統的な小さな町を選びます。

伝統的な小さな町には、国際的な大都市のように新しく、進歩した人工的な都市はないかもしれない。しかし、伝統的なものというのは、今すぐに作れる物ではないし、小さな町には、より身近に感じられる人間関係が築けるのではないかと思います。(2003.12.4)

※用例中の____部分は丁寧形、___部分は普通形であることを示す。用例末の()内の数字は、小論文実施の年月日を示す。以下の用例についても同様である。

(2) 理由は、チャーリーズエンジェルを見て私自身がかわいいと思い、それからアクションものも好きになったからという単純なことなのだが、しかし、私はその単純な気持ち一つ一つで映画の人气が有る無いという一般的な評価につながり売れる売れないとわかれるのではないかと考え

たからです。(2003.11.27)

(2) に関しては、普通形が用いられている従属節「～が」の述語「単純なことなのだ」と丁寧形が用いられている主節の述語「考えたからです」とで文体の不統一が見られるが、この不統一に違和感を持つ読み手もいるのではないだろうか。

(2) が、(3a) および (3b) のように、従属節の述語と主節の述語が、丁寧形と普通形のどちらかに統一されていれば、違和感を持つ読み手はほとんどいないと考えられる。

(3) a. 理由は、チャーリーズエンジェルを見て私自身がかawaiiと思ひ、それからアクションものも好きになつたからという単純なことなのだです^が、しかし、私はその単純な気持ち一つ一つで映画の人氣が有る無いという一般的な評価につながり売れる売れないとわかれるのではないかと考えたからです。

b. 理由は、チャーリーズエンジェルを見て私自身がかawaiiと思ひ、それからアクションものも好きになつたからという単純なことなのだ^が、しかし、私はその単純な気持ち一つ一つで映画の人氣が有る無いという一般的な評価につながり売れる売れないとわかれるのではないかと考えたからである。

したがって、小論文における丁寧形と普通形の混用のことを問題にする場合、文章を構成する個々の文の主節の文体の不統一に注意を向けさせるだけでなく、一文内の文体の不統一にも注意する必要がある。

筆者は、黒木(2006)において、日本語母語話者による小論文を調査対象として丁寧形と普通形のあらわれ方を調査した。本稿では、日本語母語話者を対象とした小論文作成の指導という観点から、黒木(2006)ではほとんどふれることができなかった複文、つまり主節と従属節とからなる一文のなかでの丁寧形と普通形のあらわれ方を考察するために、黒木(2006)で調査対象とした小

論文について再度調査を行う。

2. 先行研究および本稿の目的

本稿の目的は、上述したように、複文における丁寧形と普通形のあらわれ方について、日本語母語話者によって書かれた小論文を調査対象として明らかにすることである。

今回取り上げる複文は、従属節「～が」および「～けれど／けど／けれども」(以下、「～けれど」とする)を含む二種類の複文である。従属節をつくる形式としては他にも様々なものがあるが、今回、これら二種類の形式を一緒に取り上げたのは、次の二つの理由からである。

理由の一つは、どちらの形式も、意味・用法として、「逆接」⁽²⁾と「前置き」⁽³⁾という同様の意味・用法を持っているからである。

取り上げるもう一つの理由は、これら二種類の形式を含む従属節が、先行研究において同じタイプのものとして分類されているためである。野田(2002)では、ていねいさという観点から従属節を3つのタイプに分類している。そのうち、「ていねい形と非ていねい形」⁽⁴⁾の選択が、単文と同じで、話し手が聞き手をていねいに扱うかどうかによって決まるもの」(p.39)を「ていねいさの対立がある節」とし、従属節「～が」「～けれど」はこのタイプの節であるとしている。

この他に、野田氏は、「音楽を聴きながら、料理を作りました。」の「～ながら」や、「解答を見ずに、問題を解いてみました。」の「～ずに」のように、『します』のようなていねい形と『する』のような非ていねい形を選択する余地がないもの」(p.38)を「ていねいさの対立がない節」、また、「あそこに見えているのは、富士山です。」のように基本的には普通形をとるが、「あちらに見えておられますのは、富士山でございます。」のように、「非常にていねいな文体では、ていねい形が使われることがある節」(p.38)を「特殊なていねいさの対立がある節」としている。

3. 調査方法

本稿では、上述したように、黒木（2006）で調査対象とした小論文、すなわち、平成15年6月から12月にかけて、本学の「文章表現法演習」の授業において受講者23名に書かせた小論文を調査対象とした⁽⁵⁾。小論文解答（総数320）から従属節「～が」「～けれど」を含む複文を抽出し、それぞれの主節および従属節における丁寧形と普通形のあわれ方を調査した。

4. 調査結果

今回、調査対象とした小論文から従属節「～が」「～けれど」を含む複文を抽出した結果、全部で217の該当例があった。以下、従属節「～が」「～けれど」、それぞれを含む複文における丁寧形と普通形のあらわれ方について見る。

4.1. 従属節「～が」を含む複文における丁寧形と普通形のあらわれ方

従属節「～が」を含む複文については、表1にあるように、調査対象とした小論文から188の該当例を抽出した。このうち、従属節が丁寧形であったものは24例であったが、これらは主節も丁寧形であった（(4)）。

(4) 楽な方へと人は考えがちですが、面倒くさい分それなりに努力していくことが必要だと思います。(2003.11.6)

従属節が丁寧形で主節が普通形という例は見られなかった。

一方、従属節が普通形であるものは164例あった。このうち、主節が丁寧形であるものは5例（(5)）、普通形であるものは159例あった（(6)）。

(5) それに対してテレビからは、確かに様々な情報を得ることができるが、情報を得るのなら出版物やインターネットからも得ることができるし、今は携帯電話からもインターネットができます。(2003.7.3)

(6) テレビは確かに人々への娯楽や教養を与える文化的な役割をもっているが、それが必ずしもなくて困るわけではない。(2003.7.3)

表1 従属節「～が」を含む複文における丁寧形と普通形のあらわれ方

従属節	～が (188例)			
	丁寧形		普通形	
主節	丁寧形	普通形	丁寧形	普通形
用例数	24	0	5	159
全用例数に占める割合	13%	0%	3%	84%
			3%	

4.2. 従属節「～けれど」を含む複文における丁寧形と普通形のあらわれ方

従属節「～けれど」を含む複文については、調査対象とした小論文から29の該当例を抽出したが、全て従属節は普通形であった。そのうち、主節が丁寧形であるものは11例であった((7))。

(7) 自分の知らない事だとなんかしつこくしてしまいたくなるけれど、ぎすぎすした生活はとてつらいものになってしまいます。(2003.11.27)

一方、主節が普通形であるものは18例であった((8))。

(8) 人の知識をかりて問題を解いたりするのはその時は覚えているかもしれないけれど、時がたてば忘れてしまうかもしれないからだ。(2003.9.25)

表2 従属節「～けれど」を含む複文における丁寧形と普通形のあらわれ方

従属節	～けれど (29例)			
	丁寧形		普通形	
主節	丁寧形	普通形	丁寧形	普通形
用例数	0	0	11	18
全用例数に占める割合	0%	0%	38%	62%
			38%	

5. 考察

以下、調査結果から明らかなこととして三点述べる。

まず第一点として、同様の意味・用法を持つ従属節「～が」と「～けれど」であるが、これら二つの従属節を含む複文では、丁寧形と普通形の混用例が全体に占める割合がかなり違うことが挙げられる。従属節「～が」を含む複文の場合、188例という全用例数のうち、混用例が5例と、全体のわずか3%を占めるだけであるが、一方、従属節「～けれど」を含む複文は、混用例が29例中11例と、全体の4割近くを占めている。この違いは、これら二種類の形式が、意味・用法は同様であるが、ていねいさに関してかなり異なる性質を持つことを示している。

第二点として、従属節「～が」を含む複文と従属節「～けれど」を含む複文とでは、従属節における丁寧形のあらわれ方に違いがあることが挙げられる。従属節「～が」を含む複文では、従属節に丁寧形、普通形が来る例が両方あったのに対して、従属節「～けれど」を含む複文については、今回の調査対象では、従属節に普通形が来る例しか見られなかった。さらに、「～けれど」の場合、従属節に普通形が来て、かつ主節に丁寧形が来る例があった。(7)がその該当例であるが、このような主節と従属節の文体の不統一の例が、特に読み手に違和感を与えるものではないことから、上述したように、野田(2002)では、ともに「ていねいさの対立がある節」とされているが、「～けれど」の方は、「～が」に比較して、ていねいさの対立の度合いが小さいのではないかと考えられる。一方、「～が」の方は、(2)のような例が読み手に違和感を与えることからわかるように、ていねいさの対立の度合いが、「～けれど」に比べると大きいと考えられる。

第三点として、従属節「～が」と「～けれど」を含む複文の両方に共通することであるが、従属節に丁寧形があらわれて、主節に普通形があらわれるという例が全く見られなかったことが挙げられる。これは、(9a)、(9b)のような例が見られなかったということである。

- (9) a. 簡単な問題であれば解ける可能性はありますが、難解であればある程、その可能性は低いだろう。
- b. 簡単な問題であれば解ける可能性はありますけれど、難解であればある程、その可能性は低いだろう。

このような例が一例もなかったということは、この文がもたらす違和感、不統一感に今回の書き手が気がついていたということであろう。これには、従属節で丁寧形を使うことが持つ意味が関わっていると考えられる。すなわち、従属節で丁寧形を使うことは、単文の場合に文末で丁寧形を使う場合と同様、ていねいさに関して、「丁寧である」ということ、つまり、その文が読み手目当てであり、かつ読み手を丁寧に扱うということ、一旦表明してしまうことになるのである。よって、従属節での丁寧形に続けて、主節で普通形を使うことはこの扱いに反することになり、これが明らかな不統一感をもたらすのではないかと考えられる。この明らかな不統一感のため、逆に、このような用例が今回は見られなかったのではないかと考えられる。

一方、従属節で丁寧形を使わない、つまり普通形を使うということは、2で見たように、従属節の形式によって多少の違いはあるが、基本的に、野田（2002）が指摘しているように、「聞き手をていねいに扱うかどうかの選択をしていない」（p.41）ということである。つまり、従属節で普通形を用いることにより、ていねいさに関して従属節では無色透明なままにしておいて、主節で改めて丁寧に表すか、そうでないように表すかを選択することが可能になると言える。おそらく、(7) のような例が読み手に違和感をもたらさないのはそのためであろう。だからこそ、(7) のような例が今回の調査対象から抽出されたのであろうし、書き手によっては、(2) のような不統一感を与える複文を、ときに生み出してしまふことにつながるのではないかと推測される。

6. おわりに

以上、本稿では、複文における丁寧形と普通形のあらわれ方について見た。

今回取り上げた従属節は「～が」「～けれど」の二種類と限られた。また、従属節「～けれど」に関しては、「～けれど」「～けど」「～けれども」の各形式ごとに丁寧形と普通形のあらわれ方を検討するところまでは及ばなかった。今後、このような形式の違いをふまえ、取り上げる従属節の形式も増やし、より詳細に考察を行っていきたいと考える。

注

- (1) 沖森・半沢 (1998) では「文体には、大きく2種類あり、文章の種類に即した類型的な様式と、書き手個人に即した個性的な様式とがある」(pp.79-80) としているが、本稿で言う文体とは、沖森・半沢 (1998) の言う2種類の文体のうちの、「文章の種類に即した類型的な様式」のことである。本稿では、特に「だ・である」「です・ます」といった、述語にあらわれる表現形式に焦点を当てて考察する。
- (2) 「種をまいた^が、芽が一つもでなかった。」「2時間待った^{けれど}、彼は姿を現さなかった。」のように、「前半と後半の内容が対立したり、前半のことから予想される結果と反対のことが後半に述べられたりする」(グループ・ジャマシイ (1998)、pp.68-69) という意味・用法。
- (3) 「今日広田さんに会うんです^が、何か伝えておくことはありますか。」「係長はもうすぐ帰ると思います^{けれど}、ここでお待ちになりますか。」のように、「質問、依頼、命令など、相手に働きかける行為をする前に、前置きとなることを述べるのに用いる」(グループ・ジャマシイ (1998)、p.69) という意味・用法。
- (4) 本稿では、「非ていねい形」の代わりに「普通形」という用語を用いる。
- (5) 調査対象とした小論文は、20分という制限時間内に教員が提示したテーマについて自分の意見を390～440字でまとめるという指示のもと、受講者に作成させた。

参考文献

- 沖森卓也・半沢幹一 (1998) 『日本語表現法』三省堂
- 北村弘明・真野須美子・川井章弘・清水眞澄・宇留田初実 (1997) 『情報と表現—日本語の表現と技法—』双文社出版
- 黒木晶子 (2006) 「日本語母語話者が書いた小論文に関する一考察—丁寧体と普通体の混用についての分析を中心に—」『文教国文学』50 pp.65-78
- グループ・ジャマシイ (1998) 『教師と学習者のための日本語文型辞典』(くろしお出版)
- 小松五郎 (2005) 『大学生の就職試験 小論文・作文の書き方』成美堂出版
- 仁田義雄 (1991) 「言表態度の要素としての丁寧さ」『日本語のモダリティと人称』pp.185-202 ひつじ書房

- 野田尚史 (1998) 『『ていねいさ』からみた文章・談話の構造』『国語学』194
pp.89-102 国語学会
- 野田尚史 (2002) 「単文・複文とテキスト」『複文と談話』(日本語の文法4) pp.3-
62 岩波書店
- 浜田麻里・平尾得子・由井紀久子 (1997) 『大学生と留学生のための論文ワークブッ
ク』くろしお出版